上田市文化財調査報告書第49集

史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡平成４年度発掘調査概報

１９９３年３月

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第49集

史跡上田城跡

国指定史跡上田城跡平成４年度発掘調査概報

１９９３年３月

上田市教育委員会

序

天正11年(1583)に真田昌幸により築城された上田城は、徳川氏の大軍を２度にわたり退け天下に勇名を轟かせましたが、関ケ原の合戦後に完全に破却され廃城となりました。寛永３年(1626)、真田氏に代わり上田藩主となっていた仙石忠政は上田城の復興に着手し、真田氏時代の縄張りを継承しながらも、近世城郭としての現在ある上田城を築城しました。新たに再生した上田城は仙石、松平両氏により受け継がれ、明治維新を迎えます。

上田市教育委員会ではこの上田城跡を整備し、史跡公園として活用を図るため、平成２年度に『史跡上田城跡整備基本計画』を策定して段階的な復元整備を進めています。また、失われた遺構を確認して復元整備のための基礎資料とするため、城跡内の発掘調査を継続して進めています。

平成４年度の発掘調査では、二の丸西虎口と二の丸北虎口の調査が行われ、二の丸西虎口では虎口の石垣根石の一部と礎石を据えただけで未完成に終わった櫓門の礎石跡等が検出され、二の丸北虎口では南側石垣のほぼ全容が明らかとなりました。出土した遺構や遺物は、どちらかといえば地味なもので、華々しく人目を引くものではありませんが、このような地道な調査を積み重ねることにより、上田城跡の本来の姿が明らかとなっていくものと思います。

最後になりましたが、本調査に際し御指導いただきました文化庁文化財保護部記念物課、長野県教育委員会文化課の先生方と、終始熱心に調査に参加していただいた作業員の皆様方に衷心より御礼を申し上げ、序といたします。

平成５年３月

上田市教育委員会教育長　内藤　尚

例　　言

1　本書は、平成４年度に実施された長野県上田市大字二の丸に所在する国指定史跡上田城跡の発掘調査概報である。

2　平成４年度の上田城跡の発掘調査は、二の丸西虎口、二の丸北虎口について上田市教育委員会が直営事業として実施した。

3　遺構実測図の作成は、その一部を有限会社写真測図研究所に委託して実施し、トレースは田中弥重子、市村みつ子が行った。

4　出土遺物の実測、拓本、トレースは田中、市村が行った。

5　本書に使用した写真は、塩崎幸夫が撮影したものを使用した。

6　方位は真北を示し、土層実測図の水糸レベルに記した数値は各虎口のベンチマークとの比高差を示す。

7　本書の執筆、編集は塩崎が行った。

8　本調査に関わる資料はすべて上田市教育委員会の責任下に保管されている。その際に用いる遺跡の略号は、「ＵＤＪ」である。

目　　次

序

例　　言

目　　次

挿図目次

図版目次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1

1．調査に至る経過 …… 1

2．調査の体制 …… 2

3．調査日誌 …… 2

Ⅱ　二の丸西虎口の調査 …… 3

1．現況と調査の目的 …… 3

2．調査の概要 …… 3

Ⅲ　二の丸北虎口の調査 …… 6

1．現況と調査の目的 …… 6

2．調査の概要 …… 6

Ⅳ　出土遺物 …… 8

1．瓦 …… 8

2．土器・陶磁器 …… 8

3．鉄製品 …… 8

4．その他 …… 9

写真図版

挿　図　目　次

第１図　史跡上田城跡全体図 …… 10
第２図　二の丸西虎口調査範囲図 …… 11
第３図　二の丸北虎口調査範囲図 …… 11
第４図　二の丸西虎口遺構実測図 …… 12
第５図　二の丸西虎口土層実測図 …… 14
第６図　二の丸北虎口遺構実測図 …… 15
第７図　二の丸北虎口土層実測図 …… 16
第８図　出土遺物実測図（１） …… 17
第９図　出土遺物実測図（２） …… 18

図　版　目　次

図版１　史跡上田城跡全景
図版２　1.二の丸西虎口北側調査区　2.二の丸西虎口南側調査区
図版３　1.二の丸西虎口西側調査区　2.二の丸西虎口土塁
図版４　1.二の丸西虎口石垣跡　2.二の丸西虎口石垣跡
図版５　1.二の丸西虎口石垣隅部　2.二の丸西虎口櫓門礎石跡
図版６　1.二の丸西虎口石垣跡　2.二の丸西虎口ロータリー内調査状況
図版７　1.二の丸西虎口排水路　2.遺構写真測量
図版８　1.二の丸西虎口調査状況　2.二の丸西虎口土橋跡調査状況
図版９　1.二の丸北虎口石垣跡　2.二の丸北虎口土橋東面
図版10　1.二の丸北虎口土塁　2.二の丸北虎口土塁南側調査風景
図版11　出土遺物（１）
図版12　出土遺物（２）
図版13　出土遺物（３）

Ⅰ 調 査 の 経 過

1．調査に至る経過

上田市教育委員会では、国指定史跡上田城跡の史跡にふさわしい整備事業を実施するため、文化庁、長野県教育委員会の指導を受けながら、昭和63年度より「上田城跡公園整備計画研究委員会」を設置し、その答申をもとに平成３年３月に『史跡上田城跡整備基本計画書』を策定した。

『史跡上田城跡整備基本計画書』では、史跡上田城跡の整備を短期、中期、長期の３段階に分けて計画的に実施していくこととし、計画的な発掘調査の実施、城跡にふさわしくない施設の移転、発掘結果と史実に基づく忠実な遺構の復元整備、城構えをふまえた史跡範囲の拡大等を基本的な目標として掲げている。

上田城跡整備の短期目標としては、本丸内と各虎口の整備に重点をおき、早期に城郭としての概容を復元、整備していくことが挙げられている。その実現のために上田市教育委員会では平成２年度より上田城跡の発掘調査に着手し、平成２年度に本丸東虎口櫓門跡、二の丸北虎口石垣跡の発掘調査と本丸堀、二の丸電線埋設予定地、同排水路敷設予定地の試掘調査を行い、平成３年度には本丸西虎口と二の丸北虎口の発掘調査を実施した。そして調査結果に基づいて、平成２年度は二の丸北虎口石垣修復、二の丸電線埋設、同排水路敷設等の整備事業を実施し、平成３年度は本丸堀浚渫事業を実施した。また、本丸東虎口櫓門は発掘結果のほかに明治期の古写真、絵図面、文献史料、類例資料等を参考として復元工事が着手され、平成６年春の完成を目指して工事か進められている。

平成４年度の上田城跡発掘調査は、二の丸西虎口、二の丸北虎口（土塁・土橋）が計画され、平成４年６月９日付で現状変更申請（発掘調査）を文化庁長官宛に提出し、平成４年７月９日付委保第４の６１３号により許可を得た。

調査は上田市教育委員会の直営事業として、国、県の補助を得て実施された。本調査に係る補助金等の申請事務は次に示すとおりである。

国庫補助金関係	県費補助金関係	現状変更申請
平成４年５月27日 庁保伝第７号 〈補助金の内定〉	平成４年６月８日 ４教文第166号 〈補助金の内定〉	
平成４年５月27日付 上教社第137号 〈補助金交付申請〉	平成４年７月20日付 上教社第138号 〈補助金交付申請〉	平成４年６月９日付 上教社第145号 〈現状変更申請〉
平成４年８月24日付 委保第７１号 〈補助金交付決定〉	平成４年９月７日付 県教委教育長指令 ４教文第2-7号 〈補助金交付決定〉	平成４年７月９日付 委保第40613号 〈現状変更許可〉

２．調査の体制

調査指導	平井　聖	（東京工業大学名誉教授・昭和女子大学教授）
	塩入　秀敏	（上田女子短期大学助教授・日本考古学協会会員）
調査担当者	塩崎　幸夫	（上田市教育委員会社会教育課主事）
事務局長	須藤　清彬	（上田市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	中村　博美	（上田市教育委員会社会教育課文化係長）
事務局員	中沢　徳士	（上田市教育委員会社会教育課学芸員）
	尾見　智志	（上田市教育委員会社会教育課主事）
	塩崎　幸夫	（上田市教育委員会社会教育課主事）
	久保田敦子	（上田市教育委員会社会教育課主事）
調査協力者	市村みつ子　井部定雄　岩下眞　清水閲二　竹内和好　田中弥重子　林正治　堀内今朝次　柳沢仁美　荒井かぎ子　井沢孝子　石井真一　大井敬子　小野沢恵美子　唐沢裕子　久保田定治　小山倍子　小山幹雄　五十地市太郎　里見もとめ　土屋友春　土屋幸保　南波文平　南波正人　西沢勝　野田三雄　樋口真知子　間島亥三郎　宮崎のぶい　宮沢浅人　宮原直樹　山崎那智　（順不同）	

３．調査日誌（抄）

平成４年

９月１日（火）　二の丸西虎口の調査開始。土塁、ロータリー部分をトレンチ調査。

９月３日（木）　二の丸西虎口北東部の表土剥ぎ開始。石垣根石の一部を検出。

９月10日（木）　国家座標に基づき２ｍグリッドを設定。

９月25日（金）　二の丸西虎口西側部分の調査に入る。

10月７日（水）　二の丸西虎口遺構写真測量実施。

10月12日（月）　二の丸西虎口南側部分の表土剥ぎ開始。排水用土管を検出。

10月22日（木）　二の丸北虎口土塁南側（旧武徳殿敷地）調査。

10月26日（月）　二の丸西虎口遺構写真測量実施。

11月９日（月）　二の丸北虎口南側石垣北西隅部の調査開始。

11月19日（木）　二の丸北虎口土橋東側の石垣を検出。

11月26日（木）　二の丸北虎口遺構写真測量実施。

12月１日（火）　二の丸西虎口市営野球場内トレンチ調査。

12月８日（火）　埋め戻し作業終了。平成４年度発掘調査終了。

この後、出土遺物の整理、報告書作成作業を行い、平成５年３月25日調査報告書が刊行され調査はすべて終了した。

Ⅱ　二の丸西虎口の調査

１．現況と調査の目的

上田城跡二の丸西虎口は、上田城西側の小泉曲輪から二の丸内に通じる虎口で、絵図によると小泉曲輪より東進して土橋を渡り、石垣によって一旦北へ曲げられたのちに再び東へ曲がり二の丸内に進むように構築されていたことが窺える。櫓、櫓門等の大規模な建物は建設されず、虎口奥に番所が建てられていたのみであった。

明治７年の民間払い下げ以降、石垣の撤去、広堀跡への市営野球場建設（昭和２年）、土橋からコンクリート橋（小泉橋）への改修（同年）、ロータリーの設置（戦前？）等の改変が加えられ、かつての虎口の形状はほとんど失われてしまい、現在では僅かに虎口南側に続いていた土塁が旧状を留めているに過ぎない。

今回の発掘調査では、将来の復元整備に向けて虎口の各遺構を調査し、正確な位置と規模を確認することを主目的として実施された。

２．調査の概要

（１）石垣跡の調査

二の丸西虎口の石垣は、南側の土塁から接続して「Ｊ」状に北方へ延びる石垣と、北側の土塁から直線的に南方へ延びる石垣とが対になって構成されていた。

南（東）側の石垣は北半の西面から北西隅部へかけてと、南半の東面で石垣の根石が連続して検出された。特に北半の西面から北西隅部にかけての部分は栗石とともに良好に遺存していた。根石の規模は幅60～ 130cmを測り、大部分は塊石であったが、北西隅部の１点だけは 120×55cmの切石が使用されていた。石材はすべて緑色凝灰岩が用いられている。

上記以外の場所では遺構の遺存状況は良好ではなかったが、栗石の一部と推定される緑色凝灰岩を含む小礫郡が数か所で検出され、ロータリーの盛土内では根石を据えた跡と推定される落ち込みが検出された。

これらの遺構により推定される本石垣の規模は東西長約31m、南北長約34m、北側の幅約11mである。なお、石垣の南側については根石、栗石等の石垣の痕跡が全く検出されず、トレンチ調査でも石垣を設置した痕跡は確認できなかった。今後、さらに絵図等の史資料を検討する必要があるが、一部の絵図にみられるように南側は土坡であった可能性が考慮される。

北（西）側石垣は、南（東）側石垣との位置関係から市営野球場敷地内に位置しており、券売所北側に東西方向のトレンチを掘削したところ、石垣の東面と西面と推定される２か所から栗石とみられる小礫群が集中して検出され、僅かながら遺構が遺存していることが確認された。

（２）櫓門礎石跡の調査

現存する絵図、文献によると、二の丸西虎口には櫓門等の本格的な城門は建設されず、未完成のままで廃藩を迎えたことが知られているが、平成３年度に実施された二の丸北虎口の発掘調査の結果、櫓門の礎石３基が遺存していることが確認され、寛永３年より開始された仙石忠政の上田城再築に際しては同虎口にも本丸西虎口と同形式の櫓門を構える計画であったことが明らかとなった。

二の丸北虎口の調査結果より類推して、二の丸西虎口にも櫓門礎石が据えられていた可能性が考慮され調査の結果、虎口が北方へ屈曲した位置に南面して設置されていた櫓門礎石の痕跡を４か所で確認することができた。

櫓門建設予定地の西半は現在市営野球場の敷地となっており今回は調査できなかったが、東半の鏡柱１か所、石垣沿いの脇柱３か所で小歴が密集して検出された。これらの小礫群は比較的整った略円形プラン内に密集して検出され、礎石を据える際に下部に敷かれた栗石と推定される。

小礫群の規模は、鏡柱栗石が径約 1.5m、脇柱栗石が径約 1.4mを測るが、最後列の脇柱栗石は市営野球場の塀に沿った撹乱によって破壊されており、石垣側に僅かに遺存していたのみであった。栗石の材質は５～15cm程度の安山岩円礫が主体を占めるが若干の緑色凝灰岩片も含まれていた。

建設を予定していた櫓門の規矩は、礎石そのものの検出ではないため明確さを欠くものの、前後方向の規矩は二の丸北虎口とほぼ一致し、北虎口で遺存していた礎石（約 140×70cm）と同規模の礎石が据えられていたものと推定できる。しかし、鏡柱礎石の栗石は規模としては二の丸北虎口遺存例（ 110× 100cm）と同規模の礎石が据えられていたものと推定できるが、栗石中心部（柱芯）と石垣との間隔が北虎口の約 2.9mに対して約 2.5mと短く、鏡柱と脇柱との間隔が狭かったことを示唆している。

かつての生活面については、現存の栗石の直上に礎石が据えられ、礎石の厚さを本丸西五口、二の丸北虎口の遺存例と同等の60cm前後、礎石の地上露出部を10～15cm程度と仮定したとき、標高452.40～452.45mと推定できる。

（３）土橋跡の調査

絵図及び古老の伝承により、二の丸西虎口の前面には両側が石垣となった土橋が存在していたことが知られるが、昭和２年の市営野球場建設にあわせて土橋は撤去され、コンクリート製の小泉橋が架橋された。土橋の北側は市営野球場敷地となり、著しく改変されているが、南側は小泉橋の両端で緩い土坡となっている。

今回の調査では、旧土橋南面の土坡に３本のトレンチを入れ土層断面を調査した。その結果、いずれのトレンチでも堅緻な小礫混じりの暗褐色土が第３層として検出され、急激に南側に傾斜して下降していることが観察された（第５図）。土橋外面の石垣に関する痕跡は検出されなかっ

たものの、第３層として検出された土層はかつての土橋の中央部に充填されていた土層と推定される。

（４）その他

①西口ロータリーについて

現在西虎口中央部に約１ｍの高さで盛られているロータリーは、東西方向のトレンチ調査の結果、礫をほとんど含まない暗赤褐色土で一度に盛られたものであることが確認され（第５図）、石垣撤去の際の廃土等で盛られたものではなく、他所より搬入した土で盛られたものと判明した。また、ロータリーの周囲には幅１ｍ、深さ50cmほどの溝が巡っており、最西部から排水用とみられるコンクリート製の土管が西にむけて敷設されているのが検出された。

このロータリーがいつごろ設置されたものかは、明確な記録が無くはっきりしないが、昭和36年に勝俣英吉郎胸像を設置する際の写真ではロータリー上の樹木が既にかなり成長しており、昭和３年に城跡が公園化された後、戦前の時期に設置されたものではないかと推定される。

②礎石状遺構

調査区南側中央部の現道路部分において、長軸30～50cmの円礫数点が検出され、そのうちの３点は東西方向に並んで検出された。この場所はかつての石垣内に位置するため城郭関係の遺構とは考えにくく、石垣撤去後に建物が建てられたという記録も現在のところ確認されていないが、明治期以降に何らかの施設の基礎として設置されたものと推定される。

Ⅲ　二の丸北虎口の調査

１．現況と調査の目的

上田城二の丸北虎口は、かつて百間堀などの広大な堀に面していたが、昭和２年に百間堀が市営陸上競技場となり、昭和42年には東側の堀も児童遊園地とするために埋められてしまった。虎口石垣は大部分が明治以降撤去され、北側石垣の一部が残っていたのみである。

上田市教育委員会では平成２年度より二の丸北虎口の発掘調査に着手し、平成２年度は虎口北側の石垣根石と南側根石の一部を検出し、北側石垣の修復工事を実施した。平成３年度には公園管理事務所の物置２棟を撤去し、南側石垣の東端の確認と、西側土塁跡との接続形式の確認、絵図面に記された番所、柵門等の遺構検出を主目的として実施された。調査の結果、南側石垣根石のほぼ全域を確認し、未完成に終わった櫓門礎石を検出することができた。

平成４年度の発掘調査では、南側石垣北西隅部の位置と土塁との接続状況の確認、土橋西端に沿って北方へ延びていた石垣跡の調査、現存土塁南側の土塁裾部の調査等を主目的として実施した。

２．調査の概要

（１）南側石垣北西隅部の調査

二の丸北虎口南側石垣は平成３年度の発掘調査により、南面、東面、北面の３面の根石を検出し、ほぼ全容が確認された。今年度の発掘調査では未解明であった市営陸上競技場敷地内に位置していた北西隅部と、西面の状況について調査を実施した。

市営陸上競技場敷地内の土塁北側は、昭和２年の競技場建設に際して改変を受けているものと推定されるが、今回調査した競技場入口付近では比較的良く旧状を留めており、調査の結果、石垣北西隅部及び西端と土塁との接続部を検出することができた。

石垣根石は、前年までに検出されていた部分に続いて約３ｍの長さで遺存しているのが確認され、栗石と推定される小礫群が覆っていた。石垣西面については小礫群が石垣根石に対してほぼ直角に遺存しており、この小礫群の範囲がかつての石垣西面に相当するものと推定された。西面では根石は検出されなかったが、北西隅部からわずかに石垣を積み、持ち送りで土塁に接続していたものと推定される。

今年度の調査によって確定された南側石垣の規模は、全長26.5m、全幅 6.8～ 7.5ｍで、天端のレベルは現存北側石垣と同じく標高457.70ｍと推定される。

なお、石垣西側の土塁部分では、トレンチ調査の結果緑色凝灰岩を含む礫層と、粘土層等からなる版築層が検出されている（第７図）。

（２）土橋西側の調査

二の丸北虎口は、絵図によると南側石垣より土橋西端に沿って北方に延びる雁木（石段）を伴う石垣状のものが描かれており、仙石氏の築城計画では高麗門等の二の門と土塀を設ける予定であったと推測される。

今回の調査では、この袖石垣（仮称）の範囲の確認のために土橋西端と中央部を調査したが、袖石垣の東端部分は下水道管の敷設工事により破壊されており遺構は確認できなかった。また、西端部分は現存石垣上に連続して築かれていたものと推定され、北端は絵図によると虎口北側石垣の北面とほぼ同一線上と推定されるものの、陸上競技場入口部として削平されており、明確な遺構の確認には至らなかった。虎口南側の石垣との接続については、石垣北面の根石が連続して検出されており、一体の石垣として構築されたものではなく、石垣を構築した後で袖石垣を設置したものと推定される。

以上、発掘調査では明確な遺構は検出されなかったが、絵図の記載より推定すると、長さ約17m、幅約４m、高さ約２mの規模であったと推定できる。

土橋石垣の裏込め栗石は幅約３mで検出され、10～30cmほどの円礫が主として用いらりているのが確認された。

（３）土橋東側の調査

二の丸北虎口土橋の東側は児童遊園地として埋め立てられた結果、その位置が不明確となっていた。今回の調査では虎口側の部分について発掘を行い約 4.5mの範囲で石垣と栗石が遺存していることを確認した。石垣は一部が崩落しているものの、大部分は旧態を留めており、北側及び下部にも遺存しているものと推定される。

（４）土塁南側裾部の調査

二の丸北虎口から西側へ続いている土塁は、比較的良好に旧状を残しているが、南側裾部は武徳殿と上田招魂社の建設に際して削平され、武徳殿跡付近では玉石積みの石垣が裾部に設置されている。

今回の調査では土塁の裾部の範囲を確認するために、土塁に直交するように３本のトレンチを掘削して土層を調査した（第３・７図）。その結果、現存玉石垣は土塁を削平して設置されていることが確認され、現在の土塁勾配とほぼ同勾配で土塁裾部が続いていたことが明らかとなった。なお、武徳殿跡は基礎部分を撤去し埋め土されていたため、旧土塁、旧生活面等の検出はできなかった。

Ⅳ 出　土　遺　物

1．瓦　（第８図）

今年度調査された二の丸西虎口、同北虎口からは、それぞれ若干の瓦片が出土した。出土した瓦はすべて本瓦片で、桟瓦は含まれていなかった。

１は二の丸西虎口ロータリー内最下層より出土した菊花紋軒丸瓦である。推定される直径は15cm、厚さは 2.2cm、周縁の幅は 1.8cmを測る。胎土は白色小粒子を含み比較的精良で、色調は外面暗灰色、内面黒色を呈する。菊花紋は８弁ないし９弁と推定され、真田氏時代の所産と推定される。

２は二の丸西虎口北側より出土した均正唐草紋軒平瓦である。明灰色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。推定される瓦当幅は約25cmで、垂幅は 4cmを測る。この軒平瓦は現存する３櫓に使用されている軒平瓦と同一資料で、仙石、松平氏時代の所産と推定される。

３は二の丸西虎口より出土した軒丸瓦で、瓦当部を欠いているが、後部に玉縁を持たず、行基瓦の形態を有している。推定される全長は25.5cm、最大幅は14.5cmを測り、通常の軒丸瓦に比べて著しく短小である。胎土、焼成は良好で、外内面暗灰色を呈する。同様の瓦は平成３年度の本丸堀底の調査でも若干出土しており、真田氏時代の所産と推定される。

2．土器・陶磁器　（第８・９図）

４は二の丸西虎口より出土した土師質土器の坏で、所謂カワラケである。外面に稜を持ってわずかに内湾し、法量は口径10.4cm、器高 2.4cm、底径 6.4cmを測る。胎土に微砂粒を含み、淡橙色を呈する。

５は二の丸西虎口櫓門礎石跡付近からの出土で内耳鍋と推定され、口径は30.6cmと推定される。胎土に微砂粒を含み、焼成は軟質、色調は外面黒色、内面明橙色を呈する。

６は二の丸西虎口より出土した須恵器片で、暗灰色を呈し、タタキ成形により内面に同心円文を有する。古墳時代後期の所産と推定される。

７・８は擂り鉢でいずれも二の丸西虎口より出土し、７は推定底径11.4cmを測り、外内面茶褐色を呈する。８は底径16cmを測る瓦質の大形品で、底裏部に判読不明ながら文字と絵柄が線刻されているのが看取される。

他に二の丸北虎口旧武徳殿敷地内の土塁トレンチ調査の際に若干の陶磁器片が出土したが、これらは武徳殿とその後の総合展示館時代の所産と推定される。

3．鉄製品　（第９図）

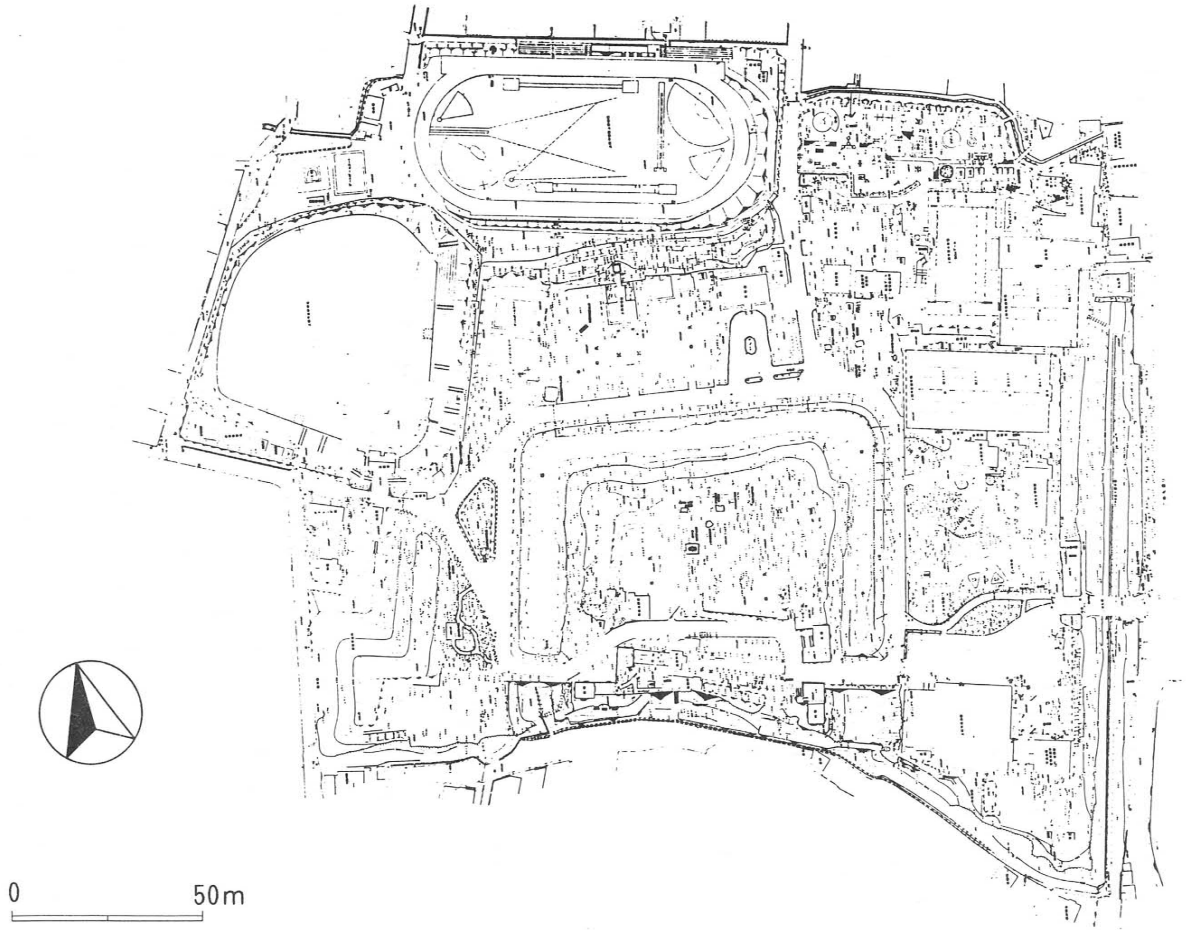
９～11は二の丸西虎口より出土した鉄製品で、９は鏃（カスガイ）である。片側を欠損してい

るが遺存状況は比較的良好である。残存長は19.1cmを測り、先端部は 5.0cmの長さで緩く弧を描いて曲げられている。

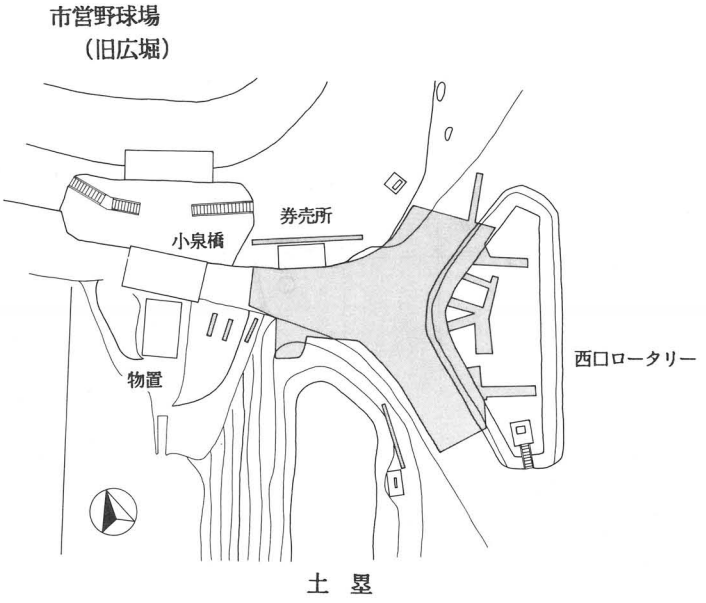
10・11は角釘で、10は全長23.0cm、11は13.5cmを測る。

4．その他　（第９図）

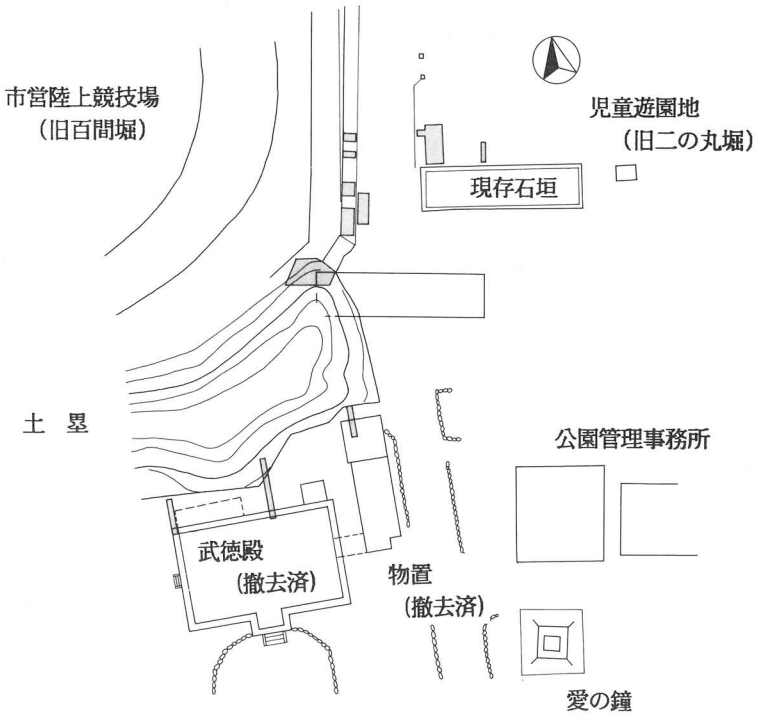
12は二の丸西虎口の現存土塁の土留めとして転用されていた五輪塔の火輪で、一辺30cm、高さ21.3cmを測る。材質は安山岩で、形状より中世の所産と推定される。



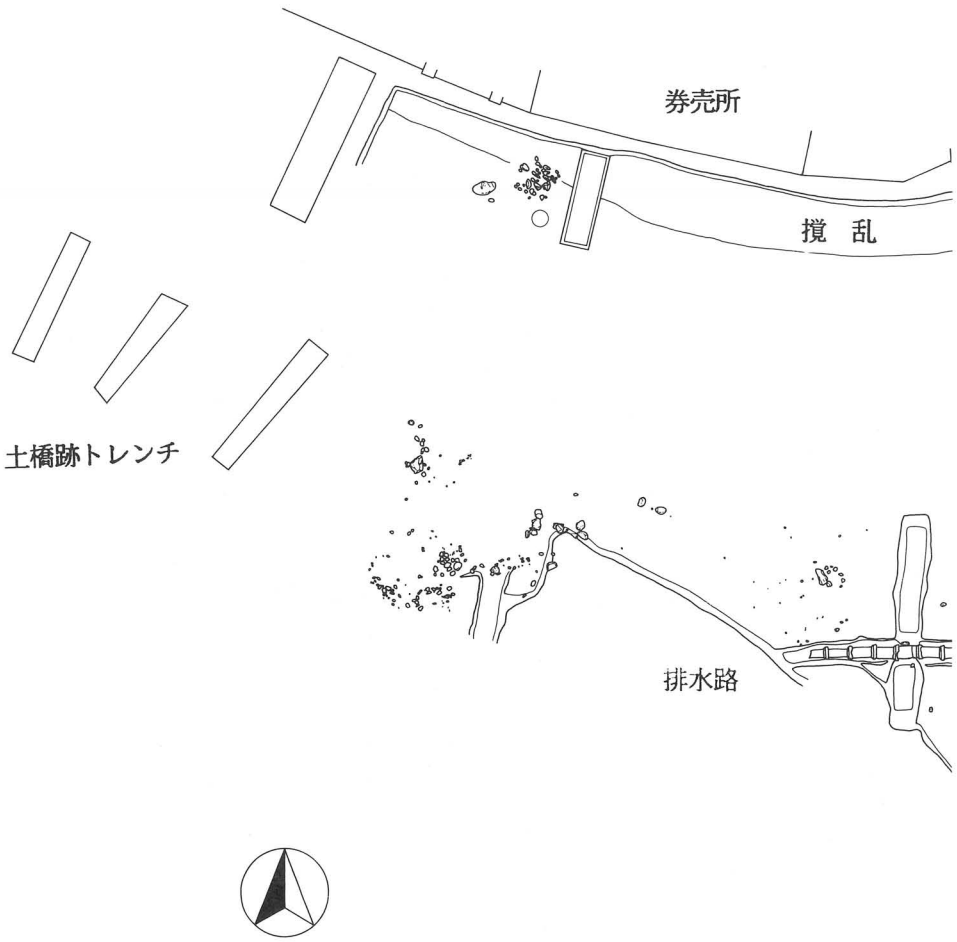
第１図　史跡上田城跡全体図



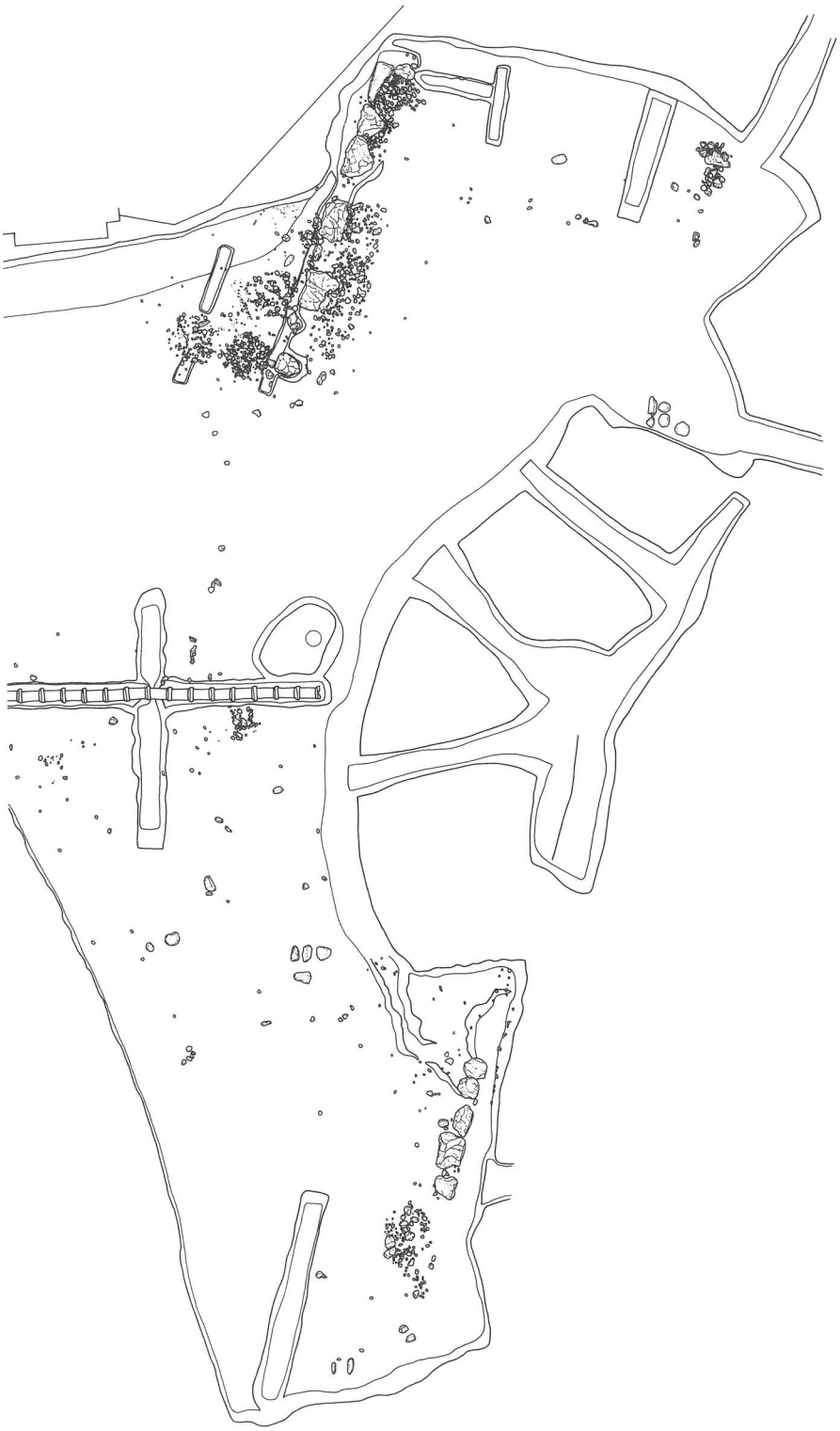
第２図　二の丸西虎口調査範囲図



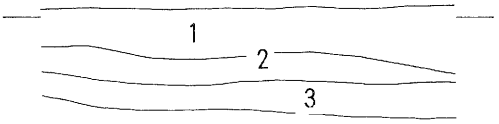
第３図　二の丸北虎口調査範囲図



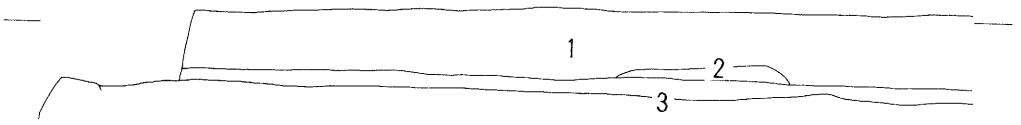
第４図　二の丸西虎口遺構実測図



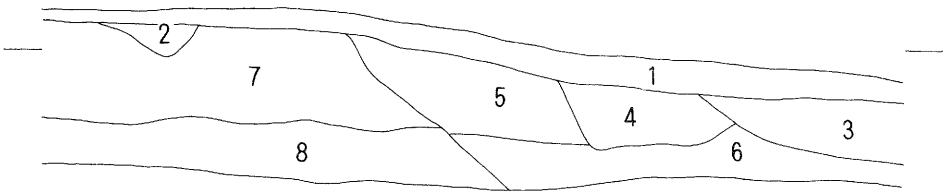
西口ロータリー横断トレンチ



第１層　暗赤褐色土、締まり、粘性に乏しい。
第２層　暗褐色土、締まり、粘性に乏しい。
　　僅かに小礫を含む。
第３層　褐色土、固く締まり、粘性に乏しい。

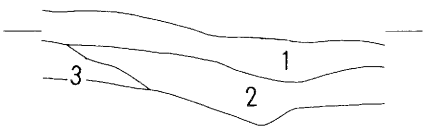


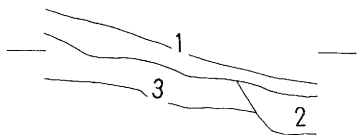
現存土塁南北トレンチ

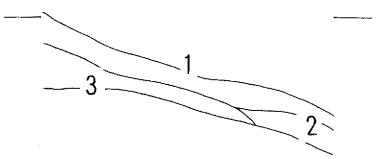


第１層　褐灰色土、締まり、粘性なし。
第２層　撹乱。
第３層　鈍い褐色土、やや締まり、粘性乏しい。小礫を含む。
第４層　礫層。
第５層　褐色土、締まり、粘性に乏しい。小礫を含む。
第６層　褐色土、締まり、粘性に乏しい。小礫を多量に含む。
第７層　鈍い黄褐色土、やや締まり、粘性乏しい。
第８層　黄褐色土、固く締まり、粘性乏しい。小礫を含む。

土橋跡トレンチ

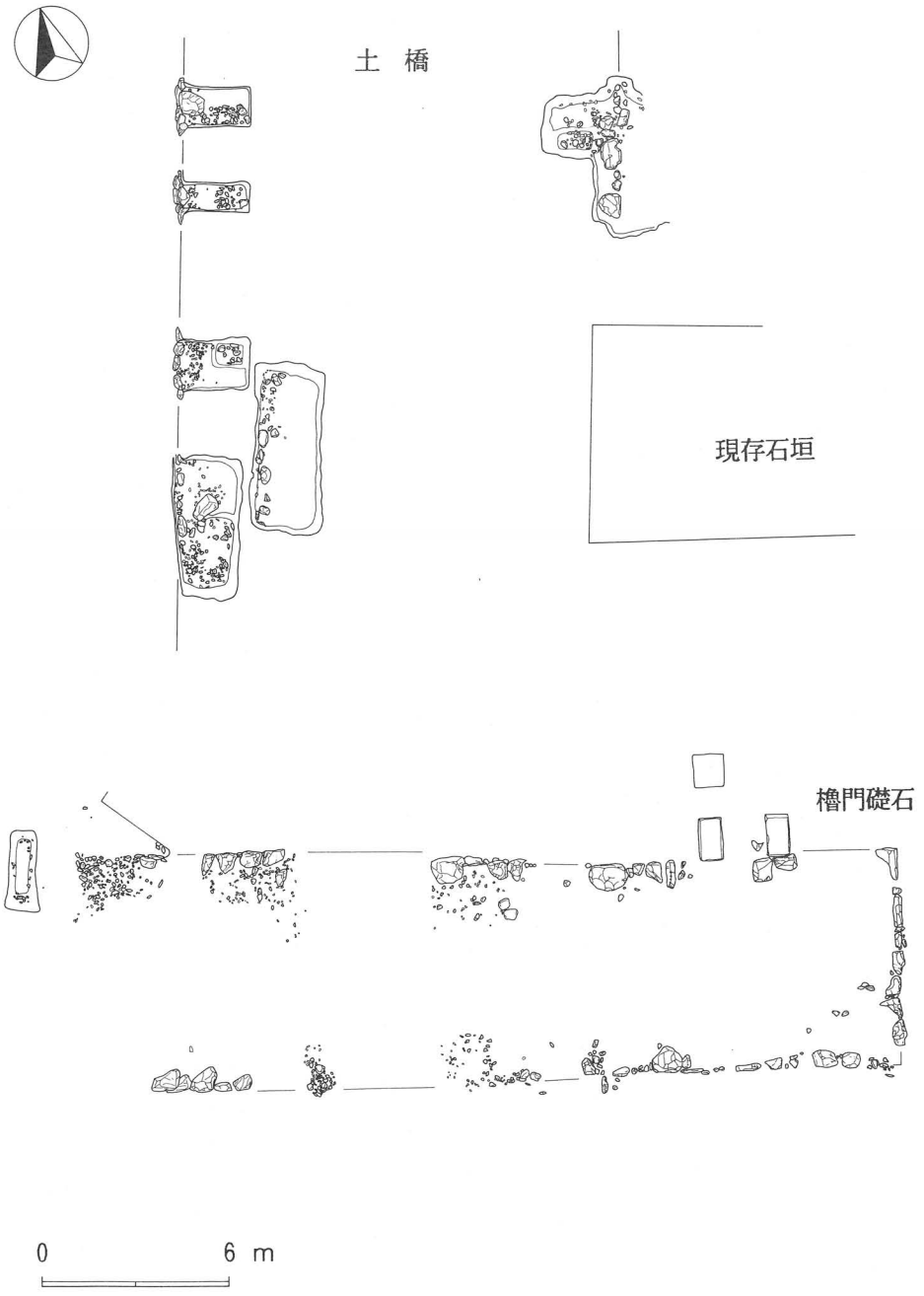






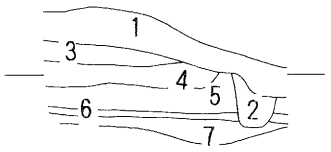
第１層　黒色腐葉土、締まり、粘性なし。
第２層　黒褐色腐葉土、締まり、粘性に乏しい。
　　小礫を若干含む。
第３層　暗褐色土、固く締まり、粘性強い。
　　小礫を含む。

第５図　二の丸西虎口土層実測図



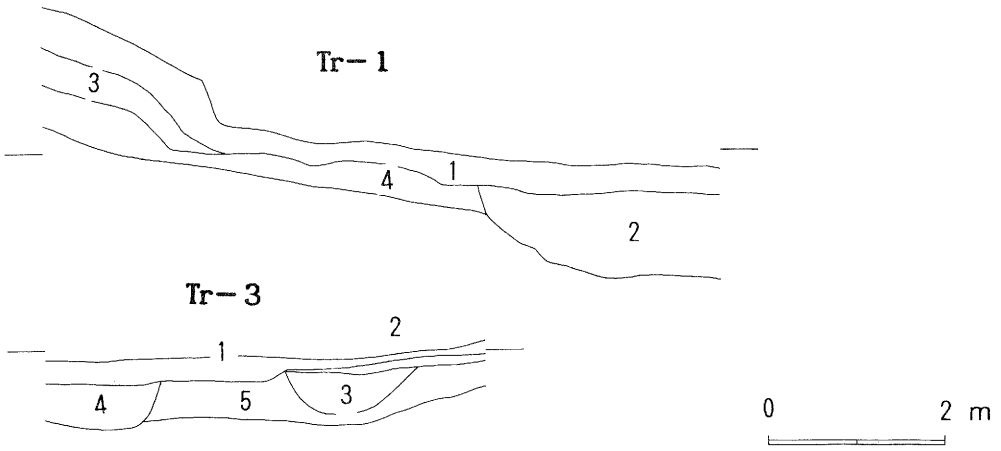
第６図　二の丸北虎口遺構実測図

土塁北側トレンチ



第１層　褐色土、締まり、粘性に乏しく、小礫を多く含む。
第２層　撹乱。
第３層　暗灰黄色土、やや締まり、粘性あり。
第４層　黒褐色土、礫層、固く締まる。
第５層　褐灰色土、小礫を含む。
第６層　褐色土、固く締まり、粘性強い。
第７層　赤褐色土、固く締まる。

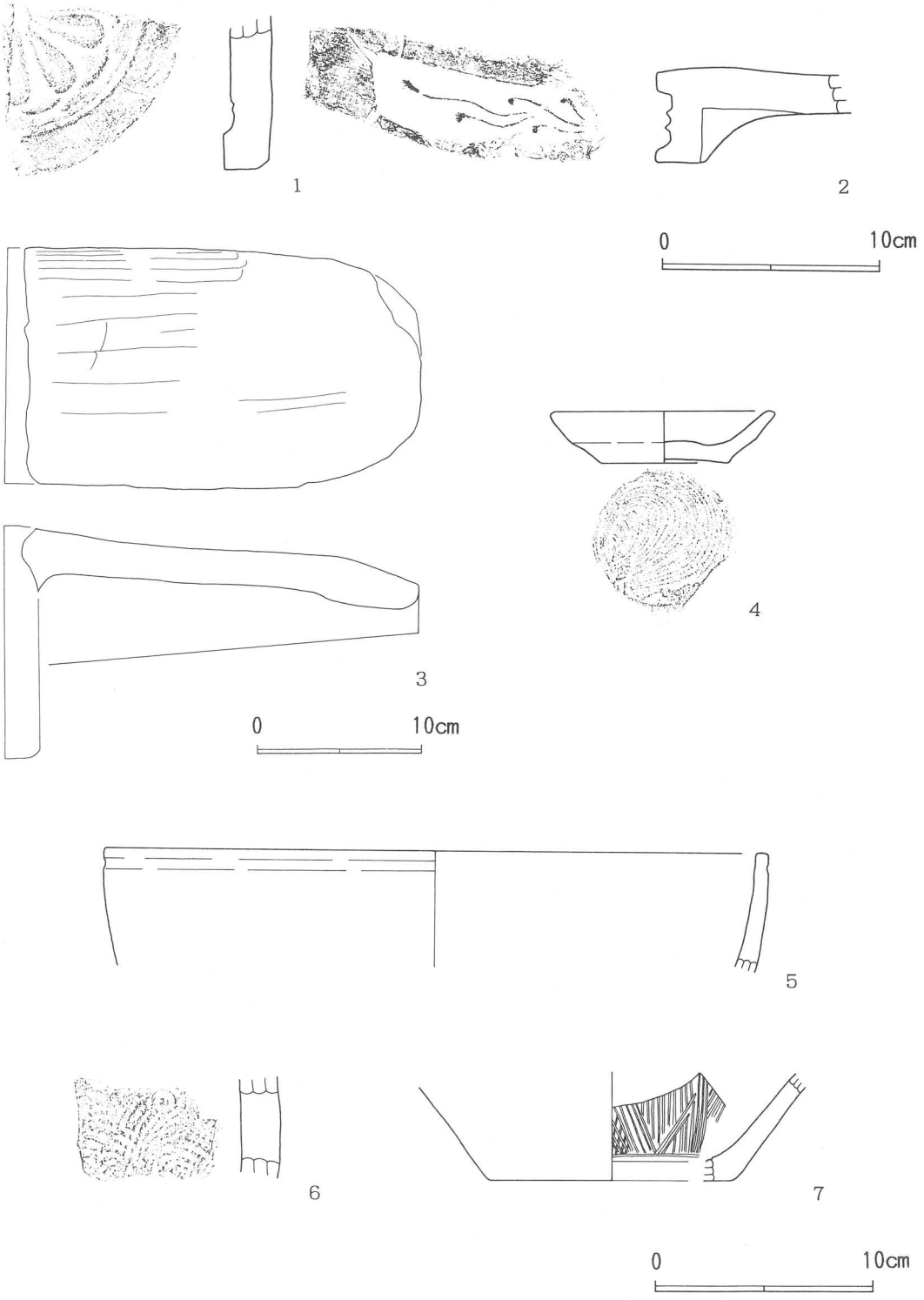
土塁南側トレンチ



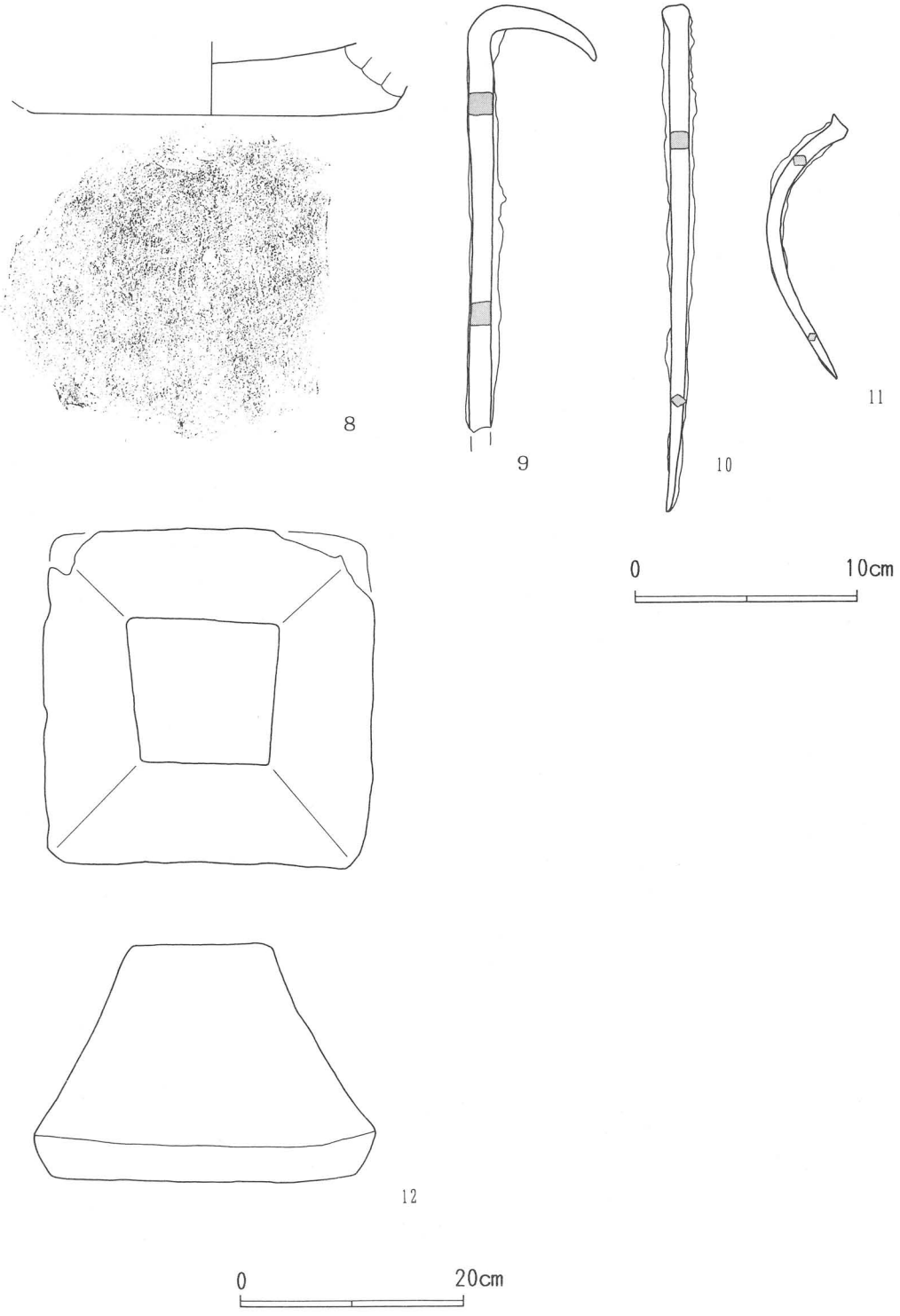
Tr－1
第１層　黒褐色土、締まり、粘性なし。
第２層　極暗褐色土、締まり、粘性乏しい。礫、塵芥を多く含む（武徳殿埋戻土）。
第３層　暗褐色土、やや締まり、粘性あり。
第４層　褐色土、固く締まり、小礫を含む。

Tr－3
第１層　暗褐色土、締まり、粘性なし。
第２層　腐葉土。
第３層　暗茶褐色土、締まり、粘性乏しく礫を多く含む（物置埋戻土）。
第４層　暗褐色土、締まり、粘性乏しく礫を多く含む（物置埋戻土）。
第５層　褐色土、固く締まる。

第７図　二の丸北虎口土層実測図



第８図　出土遺物実測図（１）



第９図　出土遺物実測図（２）

写　真　図　版

史跡上田城跡全景（航空写真）

図版1

二の丸西虎口北側調査区（北東より）

二の丸西虎口南側調査区（北西より）

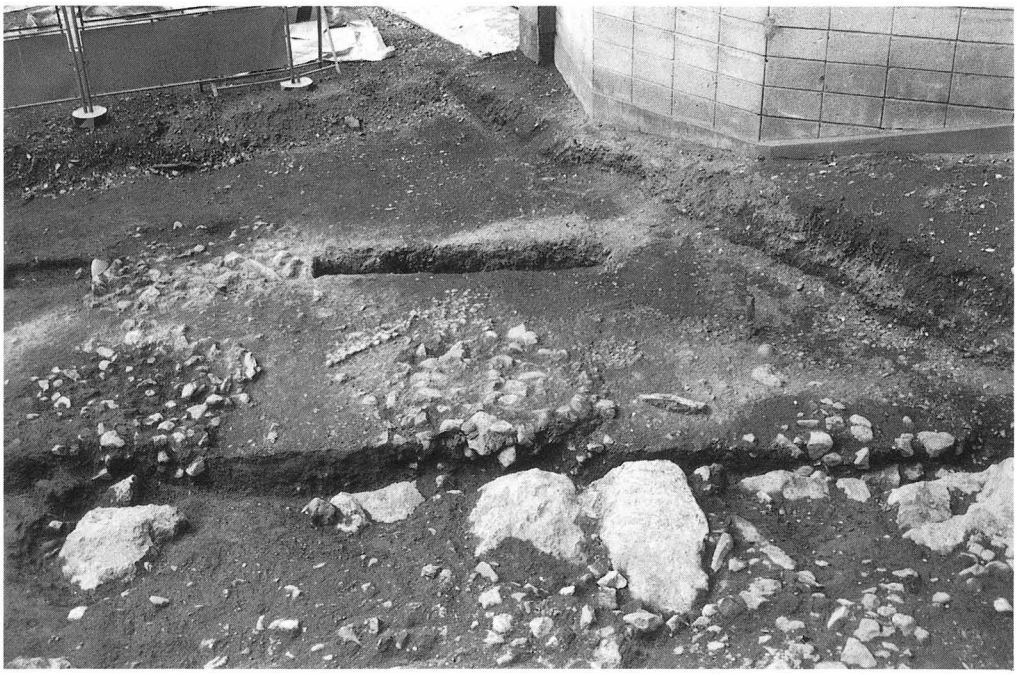
二の丸西虎口西側調査区（西より）

二の丸西虎口土塁（北より）

二の丸西虎口石垣跡（南より）

二の丸西虎口石垣跡（東より）

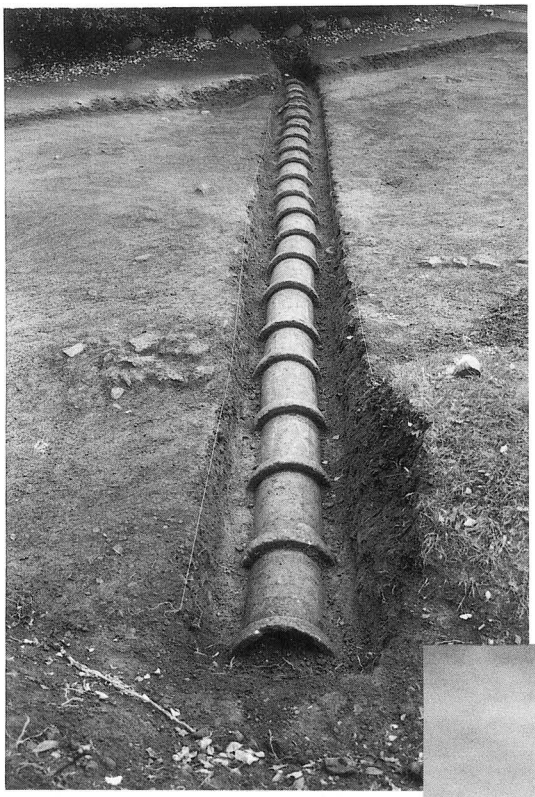
二の丸西虎口石垣隅部（北より）



二の丸西虎口櫓門礎石跡（東より）

二の丸西虎口石垣跡（南より）

二の丸西虎口ロータリー内調査状況（南より）



二の丸西虎口排水路（東より）

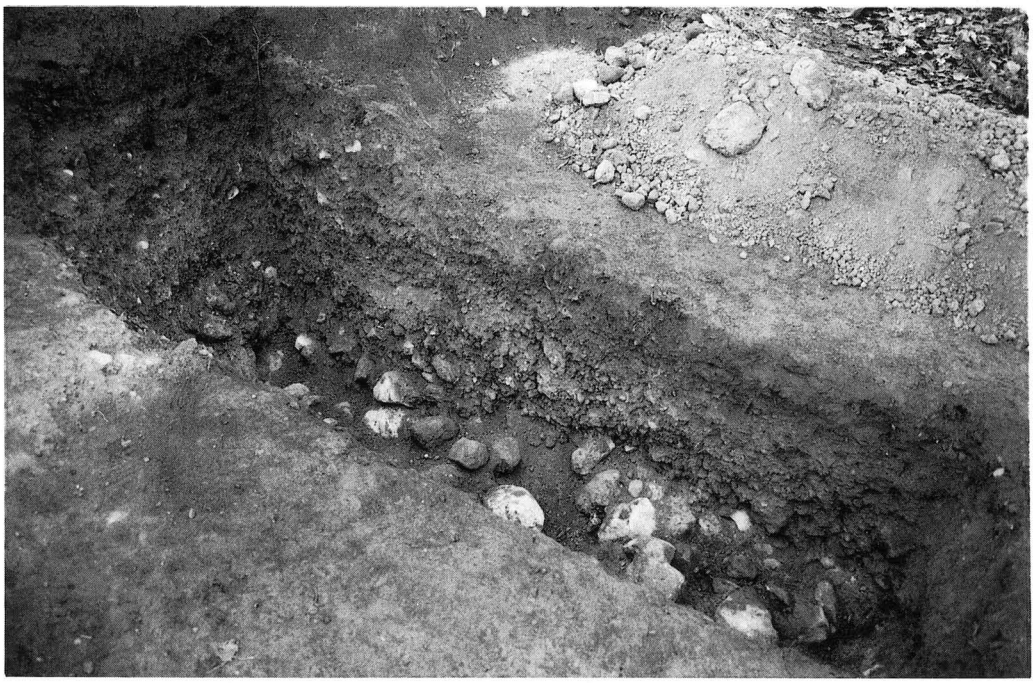
遺構写真測量

二の丸西虎口調査状況

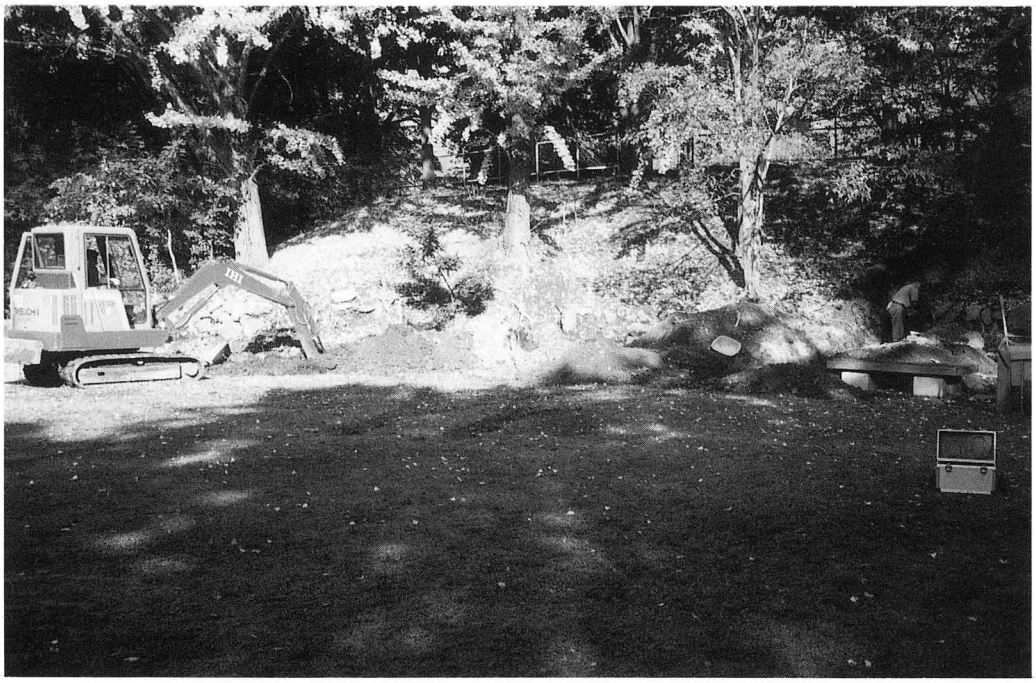
二の丸西虎口土橋跡調査状況

二の丸北虎口石垣跡（北より）

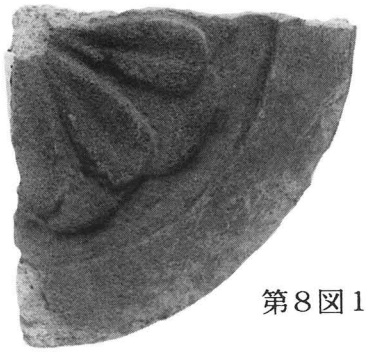
二の丸北虎口土橋東面（北より）



二の丸北虎口土塁（北東より）



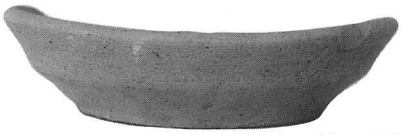
二の丸北虎口土塁南側調査風景



第８図１

第８図２

第８図３

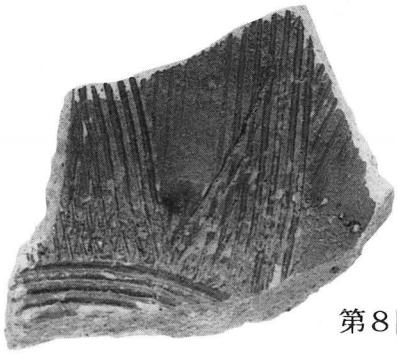


第８図４

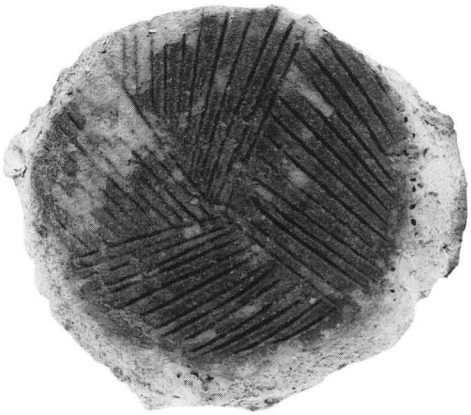
第８図５

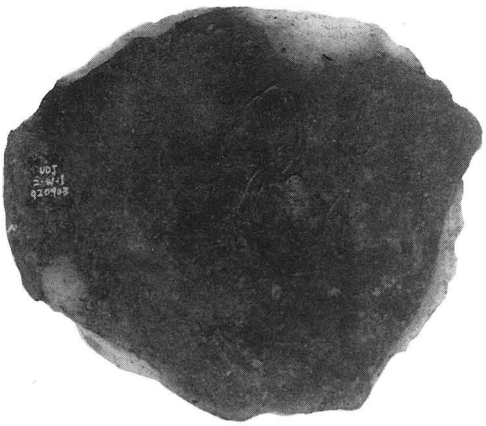
出土遺物（１）

第８図６

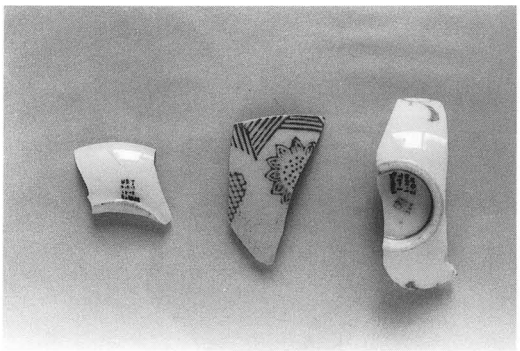


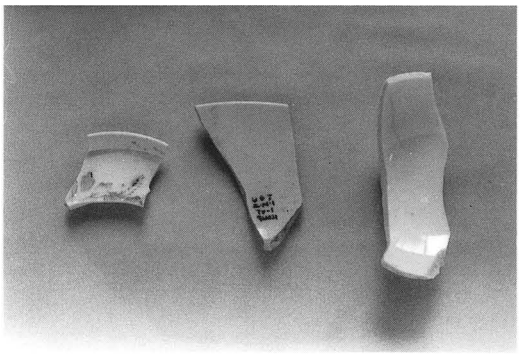
第８図７





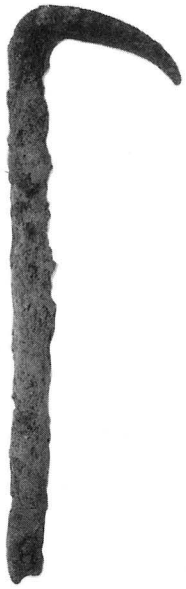
第９図８





二の丸北虎口武徳殿跡出土陶磁器

出土遺物（２）



第９図９

第９図10

第９図11

第９図12

出土遺物（３）

上田市文化財調査報告書第49集
史跡上田城跡
国指定史跡上田城跡平成４年度発掘調査概報
発　行　１９９３年３月２５日
上田市教育委員会
印　刷　上田印刷株式会社